GT-R Magazine

123 2015/Jul

WEB|CARTOP
http://www.webcartop.jp

長谷見昌弘×歴代R
インプレ動画配信中!

平成27年6月1日発行・発売(偶数月1日発行・発売) 通巻108号 第19巻 第4号 平成10年9月16日第3種郵便物認可 定価1300円

20th Anniversary

世代が変われどRの魂は不変なり

ハコスカ〜第2世代〜R35

GT-Rジェネレーション

NISMO大森ファクトリー発の特別プロジェクト

至高のBCNR33を目指して

今年は9月20日(日)に富士スピードウェイで開催

「R's Meeting 2015」イベントエントリー募集開始!

プレミアム・バージョンのロゴはマシニング仕上げ。横長のデザインは機械が入るギリギリまで掘り込む。見た目にも迫力満点だ

最大67.5㎜のディープリムはアフターの大型キャリパー装着対応と金型鍛造採用によるデザインの自由度向上によって達成した

今流行のコンケイブは萩原氏のGT-Rデザインと呼ばれる造形が原点。カッコよさを追求したサイズ、インセットから生まれた

登場4年間は陳腐化させぬアップデートで鮮度を保つ

「ホイールのデザインを決める上で特にトレンドとかは意識していません！」と言い切るのは「アドバン・レーシングGT」の仕掛け人である『横浜ゴム』製品企画部ホイール企画 チーフ・マーケティング・プランナー萩原修氏。

その萩原氏にはGT-R＝5本スポークという強い思い入れがある。それはHKS・GT-Rでグループ Aレース参戦当時、憧れのカルソニックGT-Rと同じホシノインパル製の5本スポークホイールを履いてレースを戦ったことに由来する。それがデザイナー萩原氏の原点だ。

R35をターゲットに開発されたアドバン・レーシングGTの性能は、最速タイムを刻む数多くのRに装着されて実証済み。また、今注目のサーキット走行用タイヤ、アドバンA08Bの開発時にも使用され、新たな高性能タイヤの性能を100％発揮させるホイールとして、オーナーの注目を集めている。

今年、このアドバン・レーシングGTのプレミアム・バージョンに新色が加わった。深い色合いの光沢のあるダークブルーのカラーは『レーシング・チタニウム・ブルー』と名付けられ、新鮮な印象を与える。

今、なぜブルーなのか。

「以前からブルーはやってみたいカラーでした。ホイール単体で見ると良い感じなのですが、実際に試作品をクルマにつけてみると、どうもピンと来なかったんです。ただ、今はブラックが流行ですが、黒はクルマから離れると、せっかくのデザインが隠れてどれも同じように見えるんです。それが作り手として悔しかった。だから黒からの脱却を目指してブルーにトライしたのです。試行錯誤を繰り返し、『おっ、イケルじゃない!!』というカラーに辿り着きました。この深い風合いのブルーがいいんですよ。ホイールのデザイン面も生きてきます」と萩原氏は理由を説明してくれた。

なるほど、トレンドを追いかけてはいない。いや、むしろトレンドを作り出しているといえるだろう。

「新しいホイールは市場に送り出して4年間は陳腐化させないよう、徹底的にサイズやカラー、デザインを考え抜いてデビューさせています。なぜなら、新製品を出した翌年に今年のトレンドはコレですって、まったく新しいデザインのホイールを売り出したらお客さまに失礼ですよね。期待を裏切らないため4年後も現在のものをアップデートした形でデザインを踏襲するのです」と萩原氏。

そして、最も重要なのが〝スポーツ〟という軸だ。言い換えればアドバンらしさであり、絶対にぶれてはいけない部分である。

アフター市場のホイールは、いわば趣味の領域のビジネス。全方位で展開していたらブランドイメージがボヤけてしまう。だからこそ、ある意味尖った部分が必要だ。その証拠に、アドバン・レーシング・シリーズのカタログにはスポーツ系の車種しか登場しない。かつてミニバンブームの時代には、販売店からミニバン用ホイールを作ってほしいという要望があったそうだが、萩原氏は頑として受け付けなかったという。

「結局、オマエの作りたいモノしか作らないのか、と言われました。まぁ、実際そうなんですけど」と笑う。

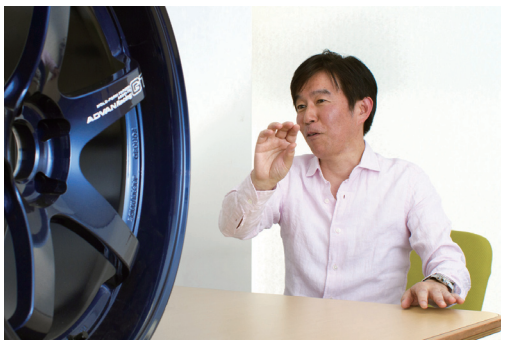
そのアドバン・レーシング・シリーズが目指しているのが世界標準の絶対的なカッコよさだ。実際、欧州の自動車ショーでも、車高は低く、ホイールはツライチ、そしてキャンバーというのが普遍の価値観。日本市場だけが特殊な環境なのだ。あのポルシェでさえ、日本仕様は細いタイヤに変更している。

もうひとつ、萩原氏ならではの拘りが、アフターパーツが装着されることを前提にデザインしている点。

例えばアドバン・レーシングGTでは、アフター市場の大きなブレーキキャリパーも装着できるよう開発段階から想定されている。

「ホイールを替えて、社外品のキャリパーにスポークが当たったらカッコ悪いですよ。アフターの商品を作るなら、そこまで考慮しないとプロフェッショナルとは言えません」

細部に宿る萩原流の拘り。突き詰めて作り上げられた美しさこそが、ヨコハマホイールの魅力である。


横浜ゴム 製品企画部
ホイール企画・デザインCMP
萩原 修氏

「昨年のRACING GOLD METALLICと対象的な深みのあるRACING TITANIUM BLUEはより造形を際立たせてくれます」と萩原氏

サイズ、デザイン、カラーなど細部まで拘りを表現

ホワイトのボディに落ちつきのあるブルーのホイールの組み合わせはベストマッチ。撮影車はフロント10.5J×20インセット24㎜、リヤ11J×20インセット5㎜をセット。深リムも美しい

THE YOKOHAMA WHEEL
ADVAN Racing GT Premium Version

10万9,080円(9.5J×20インセット28)〜12万2,040円(12J×20インセット20)／本(税込み)

「ぶれない」から際立つ!

横浜ゴムのホイール部門でありながら、プロデューサー&デザイナーである萩原修氏が作り上げるデザインは
ホイール専門メーカーに勝るとも劣らない存在感を主張し、オーナーのみならず、チューナーからも引く手あまただ。
これまで多数のヒット作を世に送り出してきた萩原氏が考える美しいホイールとはどういうものか。その核心に迫る

文:竹内俊介　写真:渡部祥勝／小林 健(本誌)
㈱YFC　☎03・3431・9981　http://www.yokohamawheel.jp/
取材協力:MCR　☎048・995・0131　http://www.mcr-ltd.com/